鹿児島女子短期大学紀要
第43号（2008）223～236頁

これからの初経指導を考える

―児童生徒と短大生の初経をめぐる実態から―

Rethinking Prepubescent Education with Respect to Menarche

by Analyzing Children and College Students'Perspective on First Menstruation

満　田　タツ江　　今　村　朋　代
Tatsue MITSUDA　　Tomoyo IMAMURA

キーワード：学習指導要領，初経指導，初経時対応，月経の受けとめ方

Ⅰ　はじめに

児童生徒の発育，発達の早期化に伴い学習指導要領（平成14年）[1]では，小学校３年生から「保健領域」（保健の教科指導）が導入され，４年生で体の変化として初経・精通を扱っている．

さらに，内容の取り扱いとして「自分と他の人では発育・発達に違いがあることに気付き，それらを肯定的に受けとめることが大切であることについて触れるものとする」としている．

現学習指導要領が開始されて５年，はたして児童生徒は初経発来をどのように受けとめ，どんな思いで月経生活を過ごしているのか，児童生徒の実態に関する報告をいまだに聞いていない．

指導者側については小林ら（2005）[2]の調査によると新たに導入された第３，４学年の「保健領域」に教員は積極的な態度を示し充実したと報告している．しかし「体の発育について」理解した教員62.8%（中学年）に対して「心の発達」についての理解は47.8%（同）であった．初経の発来は性的成熟の始まりであるため，月経を受けとめるためには，「心の発達」が大変重要である．

満田ら（2007）[3]は月経の受けとめ方と月経問題の関連性を離れた２短大比較で検討した．その結果初経指導や初経報告及び祝福行動等で母親が積極的に関わる面がみられた短大の方が月経問題が少ないという結果が得られた．特に月経の受けとめ方については初経発来年齢が上がるほど肯定的な受けとめ方をしていた．

しかし，発育発達の早期化で初経発来年齢が早まるのは当然のことであり，同時に指導も早くならざるを得ない．従って，本研究では現学習指導要領開始後の児童生徒の初経をめぐる実態を明らかにすると共に，初経指導とその後の月経の受けとめ方についても短大生との比較において検討し，これからの初経指導について考察した．

Ⅱ　研究方法

高等学校を除く児童生徒（以下Ａ群と称す）166人と対象群としてＫ女子短期大学学生（以下Ｂ

群と称す）145人を対象とした調査研究である．但し，Ａ群について調査への協力者は235人であったが，そのうち初経発来のあった166人を分析対象とした．さらに指導の状況として小学校13人，中学校５人，小中学校２人の養護教諭の協力があったがＡ群の学校と養護教諭は必ずしも同一校ではない．

属性はＢ群に８人（5.5%）宮崎県出身者が含まれるが，他のＢ群は，鹿児島県内の出身者で，Ａ群と養護教諭は鹿児島県内の学校である．さらに，Ｂ群の属性として食物栄養学専攻２年生88人，生活科学専攻１年37人，２年20人であり，Ａ群の学年については表２に示した．

Ａ群の調査について

調査時期は，2007年６月４日～６月29日である．５月下旬宮崎県を除く実習校31校と実習生のいない地域の学校（離島等）５校計36校の学校長宛に調査依頼文書，児童生徒用と養護教諭用の質問紙及び返信用封筒を送付した．（高等学校を除く）

調査方法は無記名，自記式の質問紙法で，実施については保健室利用者対象及び学級での集合調査のいずれかをその学校に一任した．

調査内容は初経発来年齢と初経時の感想５項目，初経時の対応７項目，初経指導６項目，月経痛１項目と月経の受けとめ方４項目の23項目で，それぞれの質問の最後にはその他の項目を設けている．回収は児童生徒が13校（回収率36.1%）養護教諭が20校（回収率55.5%）であり，これらをＡ群の分析対象（但し，児童生徒は初経発来のあった者のみ）として用いた．

尚養護教諭への質問項目は，保健教育の指導体制，初経指導についての保護者との連携，月経痛の状況，保健室利用状況等で，他に初経指導の時期についての聞き取りも行っている．

Ｂ群の調査について

Ｂ群については2006年７月に３クラスでの集合調査を実施（回収率100%）したものを分析対象とした．調査内容は，Ａ群の項目から「初経を誰に教えてほしいと思うか」の項目を除いた22項目である．

分析方法

分析は欠損値を除いたデータを用い，統計解析は全てχ^2検定で行った．統計的有意水準はいずれも５%未満とした．使用ソフトはＳＰＳＳ　Ｖｅｒ13.0である．

Ⅲ　結果と考察

１．検定結果

検定結果は表１に示す通りである．

調査時の平均年齢はＡ群が12.1歳，Ｂ群が19.2歳であり，両群の差は7.1歳であるが，学習上では学習指導要領の改訂という大きな節目があった．

2．初経発来時の年齢及び学年について

初経発来時の平均年齢はA群11.2歳，B群が12.1歳で0.9歳の違いが見られた．A群とB群の間にある高校生の初経発来年齢については蝦名（2007）[4] らが11.9歳と報告している．

最も早い発来年齢は両群とも9歳であるが，9歳での発来人数はB群の1人に対して，A群は4人である．また遅い年齢でもA群は14歳であるがB群は15歳である．11.2歳と12.1歳の違いは学年でいうと1学年の違いを意味する．

表1　検定結果

カテゴリ	サブカテゴリー	A群	B群	検定	n
初経発来時の感想	いやだった	44（26.5）	27（18.6）		166（A） 145（B）
	うれしかった	6（3.6）	25（17.2）	※	
	複雑	43（25.9）	84（57.9）	※	
	驚いた	63（38.0）	4（2.8）	※	
発来報告	母親へ	141（84.9）	130（89.6）	※	166（A） 145（B）
	友人へ	13（7.8）	2（1.4）	※	
発来時の対応	おめでとう	71（47.0）	85（59.9）	※	151（A） 142（B）
	大人の仲間入り	19（12.6）	17（12.0）		
	これから大変ね	23（15.2）	4（2.8）	※	
	何も言われなかった	29（19.2）	23（16.2）		
	祝い事など	98（68.5）	87（60.4）		
初経の学習	知っていた	100（63.7）	105（72.4）	※	158（A） 145（B）
	知らなかった	37（23.4）	13（9.0）	※	
	学校で	66（50.4）	104（79.4）	※	131（A，B）
	母親から	53（40.5）	16（12.3）	※	
月経の受けとめ方	女の子　あたりまえ	89（54.3）	83（58.0）		164（A） 143（B）
	健康(小)　赤ちゃん	18（11.0）	22（15.4）		
	面倒　いやだ	46（28.0）	25（17.5）	※	
	女の子は損	1（0.6）	4（2.8）		
	月経痛がある	54（34.4）	51（35.2）		157(A) 145(B)

人数（%）　※ $p < 0.05$

次に分析対象の学年割合を表2に示した．

初経発来のピークは両群とも小学校5年生と6年生であるが，小学校での発来率はA群が83.1%，B群が64.9%である．これは湯浅（2000）[5] の報告の53.6%よりはるかに多い．また湯浅は調査時6年生の初来が多く29.8%としているが，本調査での6年生はB群が多く36.6%で，A群では5年生の初来が多い．(38.0%)

さらにB群に比べA群の3，4年生の発来人数が増加傾向の一方，中学2・3年に減少傾向がみられる．以上から本調査においても，初経発来の早期化現象が確認された．

表2　調査時及び初経時の学年

年齢（歳）	学年	A群		B群
		調査学年	初経時学年	初経時学年
9	小3		4　(2.4)	1　(0.7)
10	4		14　(8.4)	7　(4.8)
11	5	9　(5.4)	63 (38.0)	33 (22.8)
12	6	54 (32.5)	57 (34.3)	53 (36.6)
13	中1	36 (21.7)	21 (12.7)	29 (20.0)
14	2	21 (12.7)	7　(4.2)	15 (10.3)
15	3	46 (27.7)	0	7　(4.8)

人数（%）

3．初経発来時の感想

図1　初経発来時の感想

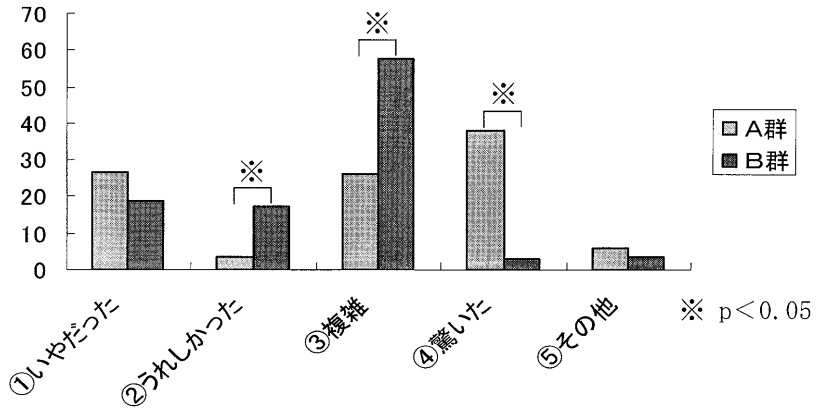


図1は表1に示した初経発来時の感想である．

松本（1996）[6] は，初経教育は子どもが出血と不快感を伴う衝撃的な驚くべき出来事として初経を経験する前に行われることが望ましいとしている．

本調査のA群では「驚いた」という感想が63人（38.0%）で，B群より優位に高く，次に「いやだ」という不快感が44人（26.5%），そして「複雑」な心境が43人（25.9%）であった．（表1より）さらに「驚いた」という回答のうち初経について「知らなかった」者が15人（25.9%）「うすうす感じていた」者が2人いた．知っていても突然やってくる出血という現象に驚かない者はいないが，知らなかったら11才前後の子どもにとってその衝撃は想像を絶するものではなかったかと思われる．まさにその他の項目で4年生が「こわかった」，3年生が「意味がわからなかっ

た」「下痢かと思った」と記述している．

B群は半数以上の84人（57.9%）が「複雑」な心境であったと回答し，A群より有意に高い値を示していた．

「いやだった」という不快感はややA群に高くみられものの有意差はなく，B群は27人（18.6%）であった．B群の特徴としては「うれしかった」という感想が25人（17.2%）で有意差が認められたことである．B群については回顧録であるが初経発来時の感想について「覚えていない」または「わからない」という回答は4人（2.8%）で97.2%の者がその時の感想や思いを覚えていた．ただB群も驚きがなかった訳ではないと思うが何とも言えない「複雑」な気持ちが強く残っていたものと思われる．

図1から得られる両群のイメージは，B群はとまどいながらも冷静さが伺えるが，A群はひたすら驚いている様子が浮かんでくる．A群については記憶に新しいこともあろうが半数に近い48.8%の者が5年生までに発来し，ピークが5年生であるため心の準備ができないまま初経を迎えたのではなかろうかと考えられる．初経について「知っていた」と回答した者でも，学校で指導を受けた時は遠いことと思っていたことが，よもや幾許もなく我が身に降りかかってこようとは，その事実にどう対処したら良いかわからないという不安が感じられる．

B群の5年生までに初経発来した者は41人（28.3%）で，ピークは6年生である．この年代は，前学習指導要領下で初経についての保健領域での教科指導も，養護教諭の行う保健指導も5年生で行われている．従って6年生以後に発来した104人（71.7%）の者は，心の準備ができたのではないかと思われる．B群で「うれしかった」と回答した25人のうち13人（52%）は発来時6年生で，さらに6人（24%）が中学1年生であった．

児童生徒にとって心の準備は2段階であると考えられる．

月経のしくみについての指導を受け，今自分の身体の中で月経の準備が始まっているということ自体衝撃的なことなので，まず身体の中の変化を受けとめる必要がある．個人差はあるが，指導を受けてから発来までに時間があると身体の中の変化を受けとめることができ，発来に向けての心構えができる．このような心の準備ができると初経発来時の不安感や不快感はより少なく初経発来の事実を受けとめることができるのではないかと推察される．

A群でも心の準備期間があったと思われる6年生，中学1年生がその他の項目で「ほっとした」と記述していた．

佐藤（2004）[7] は初経の時期を3段階（早かった，普通，遅かった）に分類し，初経が早いと感じた女性は初経を迎える心の準備が不十分であるという気持ちとマイナスの感情が結びつき，初経の時期が遅いと感じた女性は心のゆとりと月経へのプラスの感情が結びついていることを明らかにしている．

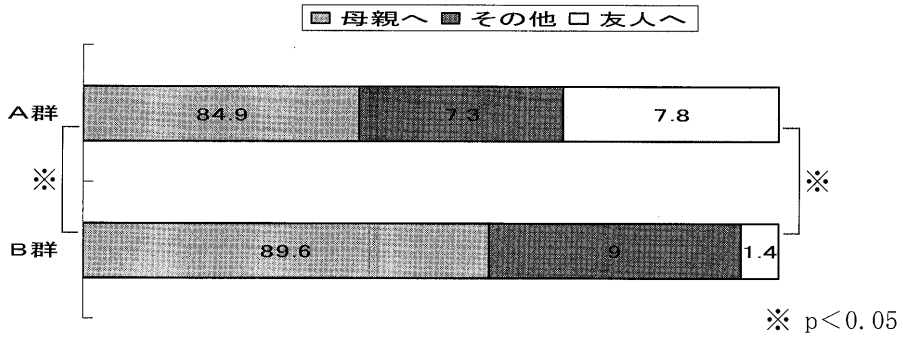
本調査における両群の初経時感想の比較から松本[6] の理論に加え，できれば心の準備をする期間も必要であることが示唆された．その期間を考慮しての指導計画を立てることが望ましいと考える．しかし一方早すぎる指導は「心の発達」や理解力の面で指導法に相当の研究が必要とされる．

2　初経発来時の対応

（1）初経発来報告について

初めて月経をみた時誰もが驚きと不安になる．そして次の行動が誰かに知らせることである．

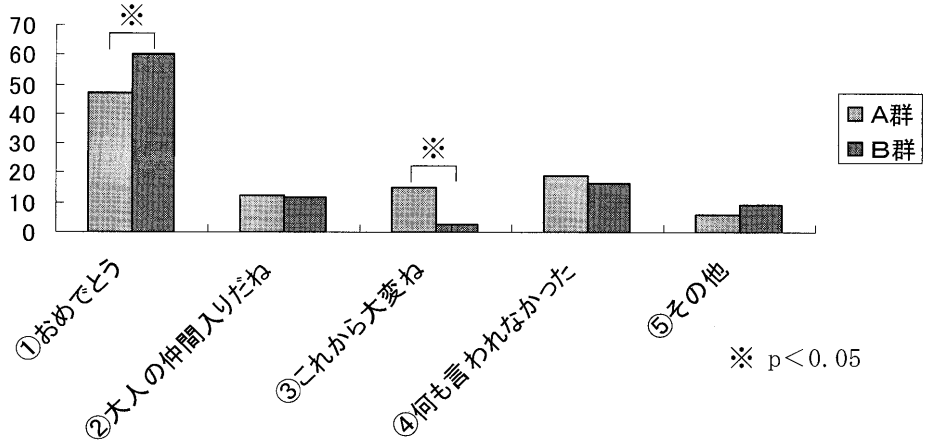
図２　初経発来報告



両群とも母親への報告が80%以上であるが，B群の方が有意に高く，友人への報告はA群に有意差を認めた．A群はたまたま側にいた友人に話したということであろうが，B群についてはまず母親への報告を優先したのではないかと考えられる．その他の内訳は，A群が姉2.4%，祖母1.8%，先生1.8%，父，叔母等であり，B群は姉4.8%，先生1.4%，覚えていない1.4%，母が気づいてくれたや他の家族等である．

（2）初経の発来を告げた時の対応

図３　初経の発来を告げた時の反応



初経の発来を告げた時，母親又は告げられた相手はどう反応したかを図３に示した．

両群とも同様な傾向であるが，「おめでとう」という祝福対応はB群が有意に高く，「これから大変ね」と今後を労う対応はA群が有意に高かった．「大人の仲間入りだね」は両群同様で，「何も言われなかった」とする対応はややA群の方が高かった．

初経の発来を告げた時の対応について川瀬（1992）[8]は，初経をむかえた時の子どもの気持ちと母親の対応との相関から，しっかりと対応し祝福を与えることが「良かった」という気持ちに

「早かった」という対応は「いやだな」という感情に関係すると報告している．

「良かった」という気持ちは，初経を肯定的に受けとめることであり，それは月経の受容と女性としての自分を認め，自分自身を大切にする気持ちを育てるために非常に大事なことである．

一方，「これから大変ね」という対応は「大変なんだ．いやだな」という否定的な気持ちを起こさせ，それが自己否定につながる可能性もある．「これから大変ね」という対応についてA群の23人（15.2%）の内18人（78.3%）は母親による対応であった．母親は今まで自分が感じていたことを口にしたのだとすると，母親自身も否定的に感じていたことが考えられる．社会通念として親は自分が育てられたように自分の子どもを育てると聞く．従って，母親の月経の捉え方は子どもの捉え方に影響することが推察される．A群は13人（7.8%）が友人に初経を告げているが（表1より）「これから大変ね」と返ってきたのはその中の3人であった．

また，「何も言われなかった」とする対応も子どもにしてみれば，ドキドキしながら知らせたのに何も言われないと「言って良かったことなのか」とさらに不安が募る．初経は子どもにとって，突然我が身に降りかかった一大事件であるから，せめて安心する一言をかけて欲しいものである．

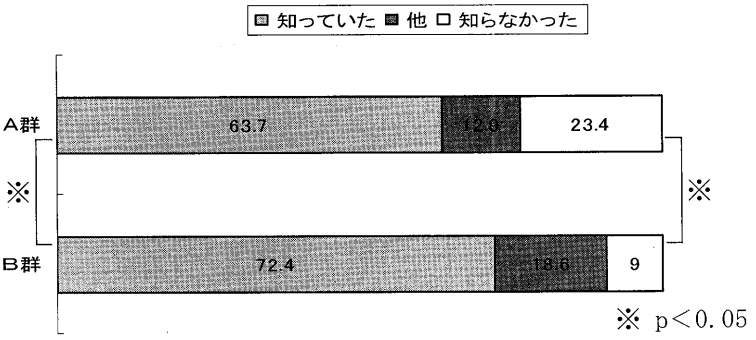
幸い本調査では，A群59.6%，B群71.9%と半数以上が「おめでとう」や「大人の仲間入りだね」等の祝福対応を受けている．さらに，祝福行動についても両群とも60%以上の者が祝い事をしてもらっている．

初経時期を肯定的と捉えるか否定的と捉えるかがその後の月経随伴症状の発現や妊娠中毒症の発現と関連しているという報告がある（松本1972）[9] が肯定的に捉えるためは，周囲特に母親の理解と協力が必要である．

（3）初経の学習について

（1）初経についての学習

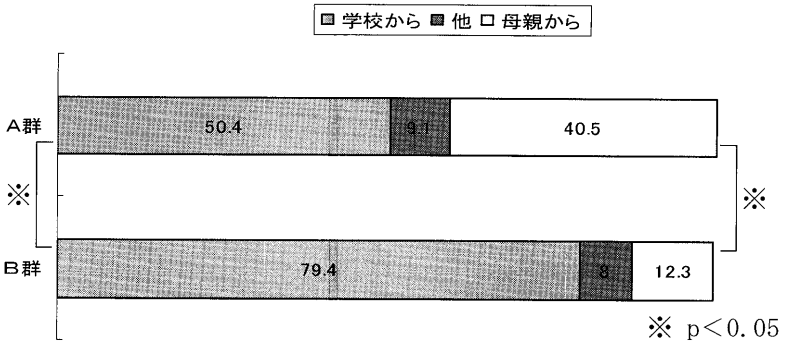
図4　初経についての知識の有無



初経について発来時までに知っていた者は，表1及び図4よりB群が105人（72.4%）で，A群の100人（63.7%）より有意に高かった．反対に知らなかった者はA群37人（23.4%），B群13人（9.0%）でA群の方が有意に高率であった．他はうすうす感じていたと回答している．

さらに表1と図5より，A群は初経について母親から聞いた者が53人（40.5%）でB群16人

図５　初経について誰に教えてもらったか



（12.3%）より有意に高かった．このことから本調査におけるＡ群は初経について知らなかった者がＢ群より多く，母親から教えてもらったことがより強く印象に残ったものと思われる．

学習指導要領[1]では，保健領域Ｆ保健の（２）体の発育，発達について第４学年で指導するものとしている．小林ら[2]の調査によると保健領域の実施について，現場では「適切な時期にある程度まとまった時間を配当すること」としている．学習指導要領に示された配慮すべき事項に関して忠実に行われていることを示唆していると報じている．従ってＡ群は４年生の保健領域で初経についての教科指導を受けているが，発達段階の上ではどの程度理解されたかが問題とされよう．

野津（2007）[8]らの小５を対象にした全国調査によると小３，４年の保健学習（２）育ちゆくからだとわたし，について76.6%の女子児童が「わかった」と回答していた．しかも他の項目よりも高い値であった．この全国調査に比較すると，初経について「知っていた」という回答を理解したものとするとＢ群は全国と同じような理解状況であるが，Ａ群は十分といえる状況ではない．これは学習意欲，理解力どちらにしても「心の発達」と関係しているため，発達段階にあわせた指導法の工夫が必要である．野津ら[10]は，児童生徒の学習意欲は教材や指導方法を工夫することによって高めることが可能であるという考え方に立ち，保健学習の担当教員がこうした指導の実施に向けて一層努力することが強く求められていると報告している．

一方，初経について学校で学習したという回答は，Ａ群66人（50.4%），Ｂ群104人（79.4%）でＢ群が有意に高かった．さらに，Ａ群66人のうち51人（38.9%），Ｂ群104人のうち68人（51.9%）は，養護教諭から教えられたという回答であった．

保健教育には，学習指導要領に示された基本的事項を指導する保健学習（教科指導）と従来養護教諭が行ってきた特別活動の時間に行う保健指導がある．

指導体制について本調査の養護教諭の回答によると，

① 教科指導は学級担任，手当て等の保健指導は養護教諭が行うという連携指導が８校

② 学級担任と養護教諭のＴ．Ｔが10校（保健学習）

③ 中学校では，保健体育の教師とのＴ．Ｔが２校（保健学習）

であった．

従って，本調査のＡ群，Ｂ群とも養護教諭から学習したとするのは，保健学習も含まれるもの

と思われる．

（2）初経指導について

従来，養護教諭の行う初経指導は5年生の宿泊学習前や6年生の修学旅行前に行われている．B群の中の生活科学専攻1，2年生の場合も5年次の5月，6月，10月等の宿泊学習前に受けていた（初経指導の授業における調査より）．小学校及び小中学校の養護教諭のうち10人から聞き取りを行ったが，やはり保健指導の時期はB群同様5年次に行い，6年次の修学旅行前には再指導を行っているという回答や徐々に低い学年でも行うということを検討しているという学校もあった．養護教諭の行う保健指導は実践的でかつ行事の前に行われるため，児童生徒にとっては強く印象に残ったものと思われる．

また，初経指導の保護者との連携について養護教諭から得られた回答は表3のとおりである．

表3　初経指導についての保護者との連携　（複数回答）

連　携　内　容	n（%）
来校時対応（参観日や家庭教育学級）	3（12.0）
特に必要な児童生徒について電話にて連絡	6（24.0）
保護者側からの相談に対応	10（40.0）
その他　必要時対応	2　（8.0）
学校だより　保健だより　学級通信	3（12.0）
学校保健員会	1　（4.0）

人数（%）

初経及び月経については必要に応じて対応しているというのが現状だが，授業参観日や家庭教育学級で積極的に母親向けの講話を行っているという学校が3校あり，それぞれの現場でも前向きな取り組みがなされていることを感じることができた．

松本[6]は，初経教育は単に月経の手当てや生理的なメカニズムを教えるだけでなく，女性としてのアイデンティテーを促進する面からのアプローチが必要であり，それを効果的に進めるには母親に対する適切な予備教育も必要と考えられるとしている．

また，これはA群のみの調査だが，児童生徒は初経を教えて欲しい相手として84人（50.9%）が母親を，次に養護教諭を56人（33.7%）があげている．その他25人（15.2%）は担任の先生や姉等である．

高村・伊野田（19991）[11]の調査でも子ども達は初経を教えて欲しい相手として77.5%が母親，73.4%が養護教諭を挙げている．初経について，母親から聞いたとする53人のうち42人（79.2%）は教えて欲しい相手として母親を挙げていた．特に小3で初経を迎えた4人のうち3人は母親から聞き，1人は知らなかったと回答している．

初経の早期化もさることながら，満田ら[2]の調査によると，初経時の母親の関わりがその後の月経問題を少なくするという利点がある．学校の集団指導と違って，母親の経験や思いを伝え

ることができ，親子の重要なコミュニケーションの場ともなり得るので，児童生徒が母親を望む一番の理由はそこにあると思われる．従って，これからの初経指導は従来の指導に加えて母親への指導も必要となろう．母親の対応の仕方によっては月経に対するマイナスイメージを抱く可能性があるからである．３，４年生の母親へ保護者参観日等を利用して，初経時の上手な関わり方を指導することをお薦めしたい．そして指導については，単に子どもを生むための機能だけでなく，佐藤[7]の薦める「女性は男性には持ち得ない性周期という身体のリズムを持ち，これは自己の健康も把握しやすい，優れた機能である」ことを理解させることも大切である．

初経に関わる指導は性教育の原点である．最近は性行動の若年化が進み，性感染症や人工妊娠中絶率が急増してきた．木原（2006）[12]によると，こうした性行動の背景には性意識の変化があり，性意識や性行動は家族との会話とも強い関係がある．家族と全く話をしない生徒は話をする生徒に比べ，性行為を容認するという意識（性意識）・性経験率は２倍程度も高いということである．

健全な性意識や性行動について，自ら考え判断し適切に行動できる能力を育てるためにもその基本となる初経時の対応は，学校の指導に加え，母親もポジティブな関わりが必要と考える．

子どもは月経や性に関する身体のことについては知りたいと思うことばかりである．秘め事にするのでなく，親子の会話の絶好の機会だと思われる．

（４）月経の受けとめ方

質問項目の１つに小学生には健康との関連を中学生と短大生にはさらに母性との関連を追加した．

結果としては，「女の子だから」という促え方の方が強く，両群とも健康や母性と関連した考え方は低かった．特にＡ群で健康や母性との関連をあげた18人（11.04%）のうち小学生（健康）は８人（44.4%）中学生（健康，母性）は10人（55.6%）であった．また複数回答では「女の子だから」の次に「健康，母性」をあげた者が小学生３人中学生５人いた．

図５　月経の受けとめ方

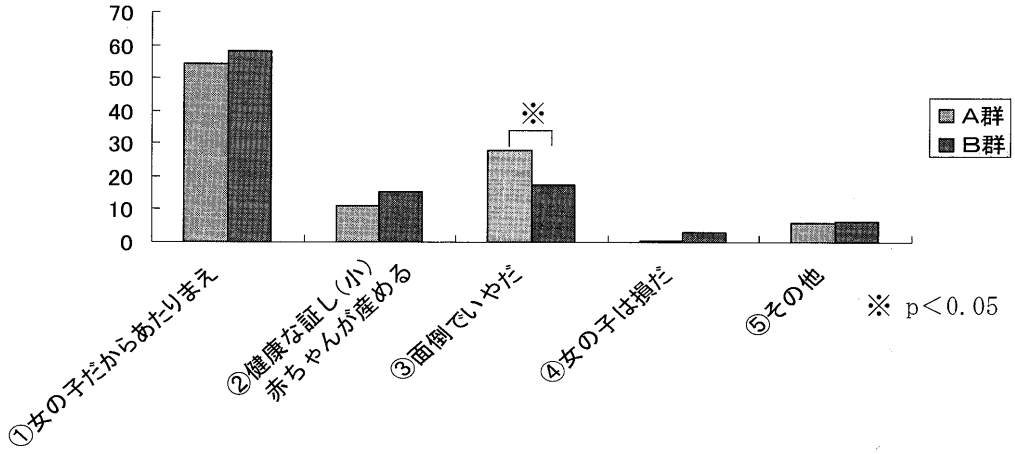


図５月経の受けとめ方について，①②を肯定群，③④を否定群として両群の検定を行ったが有意差は認められなかった．しかし，①～⑤の１項目ずつについては③「面倒でいやだ」という否定的な受けとめ方においてＡ群が有意に高かった．ただ注目すべきは回答の仕方で，Ａ群は１つを選べず肯定と否定の両方を選んだ者がいて，より強い方に◎をしていた．最も多い選択が①「女の子だからあたりまえ」と③「面倒でいやだ」であり，小学校に５人，中学校に８人いた．月経の意味について知った以上それを受けとめようとするが，現実には「憂うつで煩わしい」という認識と現実のギャップが感じられる．

松本[6]は，初経後間もない子どもたちは否定的な印象が残っており，その後16才くらいまでは中立の印象が多く，そして成熟年齢の19才以上では積極的肯定が多いとしている．

確かに，図５の①②の肯定群に有意差はないが，Ｂ群が高めである．その他は，両群とも「わからない」が一番多く，「びみょう」「何とも思わない」「大人の仲間入りができてよかった」等である．

表４　月経の受けとめ方と初経時の感想

カテゴリー	いやだった		うれしかった		複雑		おどろいた		その他		計	
	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B
女の子だからあたりまえ	20	10	4	17	22	52	42	3	1	1	89	83
	(12.2)	(7.0)	(2.44)	(11.9)	(13.4)	(36.4)	(25.6)	(2.1)	(0.6)	(0.7)	(54.3)	(58.0)
健康な証拠	2	3	1	6	5	13	8	0	2	0	18	22
	(1.22)	(2.1)	(0.61)	(4.2)	(3.05)	(9.1)	(4.9)	(0.0)	(1.2)	(0.0)	(11.0)	(15.4)
面倒でいやだ	19	12	0	1	10	12	12	0	5	0	46	25
	(11.6)	(8.4)	(0.0)	(0.7)	(6.1)	(8.4)	(7.32)	(0.0)	(3)	(0.0)	(28.0)	(17.5)
女の子は損だ	1	0	0	0	0	4	0	0	0	0	1	4
	(0.61)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(2.8)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.0)	(0.6)	(2.8)
その他	2	2	1	1	6	3	1	1	0	2	10	9
	(1.22)	(1.4)	(0.61)	(0.7)	(3.66)	(2.1)	(0.61)	(0.7)	(0.0)	(1.4)	(6.1)	(6.3)
計	44	27	6	25	43	84	63	4	8	3	164	143
	(26.8)	(18.9)	(3.66)	(17.5)	(26.2)	(58.7)	(38.4)	(2.8)	(4.9)	(2.1)	(100)	(100)

表４で初経発来時の感想の回答はあるが，月経の受けとめ方についての回答がない者は欠損扱いとした　　人数（%）

月経の受けとめ方と初経時の感想の関係について，表４より「月経は面倒でいやだ」と感じたＡ群46人中19人（41.3%），Ｂ群の25人中12人（48.0%）が初経時にいやだったと感じている．反対に初経時にうれしかったと感じた者はＢ群の１名を除いて否定的な感情は抱いていない．

従って，月経について捉える場合自分が発来時に感じた直感も強く影響しているのではないかと思われる．鈴木（2006）[13]らは，初経時の影響は月経観の形成に影響はあるが，毎月繰り返しある月経に対して肯定的な受けとめ方ができるきっかけにはならないと考えられると報じている．

本調査でも「女の子だからあたりまえ」という受けとめ方は50%以上であったが，より健康面を重視した肯定的な受けとめ方は「面倒でいやだ」という否定的な受けとめ方より低く，両群とも同じ傾向であった．しかし，繰り返しある月経にもかかわらず，「女の子は損だ」という考え方は大変少なかった．

月経痛については有意差は認められなかったが，B群はA群より痛みの程度が強い者が多かった．（表５）B群は平均年齢19.2才という性周期の成熟年齢に入っているため機能性月経痛によるものと思われる．

また，月経痛と初経時の対応について本調査では，「これから大変ね」という否定を招く対応がどのように影響するか，軽い痛みを除く月経痛との関係を表５にまとめた．B群で「これか大変ね」という対応を受けた４人は全員月経痛が強かったが，A群の場合は「これから大変ね」という対応を受けた23人中２人だけが月経痛が強かった．両群とも60%以上の者が初経時肯定的な対応を受けていた．従って，本調査では月経痛と初経時の対応についての関係を明らかにすることはできなかった．

表５　月経痛と初経時の対応

月経痛	月経痛の程度		初経時の対応	
A群54人 (34.4%)	内服・保健室休養	16(29.6)	おめでとう	8(42.1)
	学校を休む	3 (5.6)	大人の仲間入りだね	4(21.1)
	軽い痛み	35(64.8)	これから大変ね	2(10.5)
			その他　5(26.3)	
B群51人 (35.2%)	内服・保健室休養	31(60.7)	おめでとう	21(60.0)
	学校を休む	4 (7.8)	大人の仲間入りだね	5(14.3)
	軽い痛み	16(31.4)	これから大変ね	4(11.4)
			その他　5(14.3)	

人数（%）

養護教諭の調査から得られた月経痛の状況は，従来と変わらないが17校，増えているような感じがするが３校であった．保健室利用状況については月経痛としてではなく，腹痛として処理されているため正確な数字を知ることはできなかった．B群では保健室利用状況の第１位が月経痛である．（満田ら[3]の調査による）

Ⅳ　まとめ

初経の早期化に伴いこれからの初経指導を検討する目的で，児童生徒166人，短期大学生145人に，初経をめぐる実態調査を行った．

主な結果は次の通りであった．

１）平均初経年齢は児童生徒が11.2才，短大生が12.1才で早い者は小学校３年生で発来していた．

2）初経発来時の感想は，児童生徒は「驚いた」38.0%，「いやだった」26.5%，「複雑」25.9%の順に感じていた．短大生は「複雑」57.9%，「いやだった」18.6%，「うれしかった」17.2%の順であった．「いやだった」という不快感に有意差はないが，「複雑」「うれしかった」は短大生が有意に高く，「驚いた」は児童生徒が有意に高かった．早期に発来した児童生徒には心の準備が必要であったと思われる．

3）初経を誰に報告したかについては，児童生徒短大生ともに母親が80%以上であったが，中でも短大生が有意に高かった．また，「おめでとう」という祝福対応は児童生徒47.0%に対し，短大生は59.9%で有意差を認めた．「これから大変ね」という対応は児童生徒が15.2%で有意に高かった．祝い事については60%以上の児童生徒及び短大生がしてもらっており，総じて良好な対応であった．

4）初経について発来までに「知っていた」者は，児童生徒63.7%に対し短大生は72.4%であり短大生が有意に高く，「知らなかった」者は児童生徒23.4%が有意に高かった．初経について学校で学習したとする者は，短大生が79.4%，児童生徒は50.4%で短大生の方が有意に高く，母親から聞いた者は児童生徒が40.5%で有意に高かった．

保健学習で初経については，児童生徒は4年生で，短大生は5年生で学習しているが児童生徒の場合学習の成果が十分と言える状況ではなかった．

5）初経について教えてほしい相手として児童生徒は50.9%が母親を，33.9%が養護教諭を挙げていた．内容的に個別指導も望んでいるのではないかと推察された．

6）月経の受けとめ方では，児童生徒短大生ともに50%以上が「女の子だからあたりまえ」と受けとめていたが，「面倒でいやだ」という否定的な受けとめ方は児童生徒が28%で有意に高かった．月経の意味について受けとめようとする反面，「憂うつで煩わしい」という認識と現実のギャップが感じられた．

以上から，これからの初経指導（保健学習，保健指導の両方を含む）はますます低年齢化していく初経と心の発達のアンバランスの中で，如何にしっかりと子どもたちに理解させるかが最大の課題となろう．

その際，実態調査から従来の指導に加え以下の3点が考えられた．

①早い時期に母親へ初経時の関わり方について指導する．

②健康上の視点に立った性周期の優れた機能を重視した指導を行う．

③性教育の原点として自己肯定感を育てる指導にする．

子どもたちの現代的課題が山積する中で，初経指導はその全ての基本として今後の一層の充実と成果が求められる．

謝　辞

稿を終えるにあたり，本調査にご協力頂きました小中学校の校長先生をはじめ，養護教諭，児童生徒の皆さん，本学の学生に厚くお礼申し上げます．

参考・引用文献

1）小学校　学習指導要領　1998　2003　一部改訂　文部科学省　pp84～85
2）小林　稔，高倉　実　2005　小学校体育「保健領域」の実施状況及び教員の意識とその変化について　学校保健研究　Vol47　pp172～180
3）満田タツ江，古川ツネ子，今村朋代　2007　短期大学学生の月経に関する調査　鹿児島女子短期大学「紀要」第42号　pp11～20
4）蝦名智子，松浦和代　2007　思春期女子における月経の実態と月経教育に関する調査研究　第48回日本母性衛生学会総会　学術集会抄録集　pp133
5）湯浅弘子　2000　小学校における初経発来の傾向　学校保健研究　Vol42　pp151～162
6）松本清一　1996　豊かなセクシュアリティの育成と月経教育　産婦人科の世界　48　pp915～924
7）佐藤秋子　2004　人格形成に月経がもたらす影響　月経らくらく講座　pp30～39
8）川瀬良美　1992　初経時の母親の対応の心理的影響　第10回日本思春期学会学術講演会シンポジウム　pp22～27
9）松本清一　1972　月経痛の治療　産婦人科治療251　pp39～43
10）野津有司他　2007　全国調査による保健学習の実態と課題－児童生徒の学習状況と保護者の期待について－　学校保健研究　Vol49　pp280～295
11）高村寿子，伊野田法子　1991　初経教育ブック　日本家族計画協会　pp10～16
12）木原雅子　2006　性行動－その実態・社会要因とWYSH教育の戦略－　学校保健研究47　pp501～509
13）鈴木雅子，松田芳子　2002　女子高校生の月経に対する意識調査　日本養護教諭教育学会第10回学術集会　pp92～93

（2007年12月5日　受理）